



TITLE:

大学生の育児意識に関する一考察 (研究活動報告3)

AUTHOR(S):

中澤, 祐子; 星野, 明子; 桂, 敏樹

CITATION:

中澤, 祐子 ...[et al]. 大学生の育児意識に関する一考察 (研究活動報告3).
京都大学医学部保健学科紀要: 健康科学 2006, 2: 73-77

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/39580>

RIGHT:

研究活動報告—3—

大学生の育児意識に関する一考察

中澤 祐子*, 星野 明子**, 桂 敏樹**

はじめに

我が国では核家族化や少子化が進むとともに、育児不安を抱える母親が急増しているといわれる。母親が、育児を楽しんでいると感じているかどうかについては、1982年から1991年の10年間に82%から32%に著しく減少しているとの報告がある¹⁾。中沢ら²⁾は、現在の日本の母親の特徴について、少子化により母親が子供本来の姿を知らない、核家族化によって身近に相談する相手がいない不安、極端な母子密着、育児による母親の自由時間の欠如がもたらすストレスの増大、などを指摘する。こうした社会的背景と家族構造の変化が母親の育児不安に関与していると考ええる。また、父親が育児に参加することが、母親の安定した心理状態での子育てに結びつく³⁾と報告³⁾される。しかし、わが国では、子供が就寝している時間に帰宅する父親が4分の1を占め⁴⁾、子供と接する時間が少ない現状がみられる。

本研究では、母親の育児不安を軽減するための支援方法を考える上での基礎的な資料とするために、将来の父母候補である男女大学生の育児意識を検討することを目的とした。

方 法

1. 調査および分析

1) 対象と調査

対象者は、看護や福祉・保育系の学科を専攻していない男女大学生（20～22歳）各2名ずつ、4名である。調査は、平成16年8月6～8日、9月6日に実施した。インタビューガイドを示し、1人につき約1時間の面接を実施した。面接内容は対象者に了承を得た上でテープに録音した。

2) データの分析

分析は面接の録音テープ内容を逐語記録におこした。育児に関する逐語記録の部分を内容のまとめりご

とに抽象化しコード化した。さらに、同じ意味内容を含むものを集めて、小カテゴリー、中カテゴリー、大カテゴリーに分類した。データ分析の過程では、質的研究の経験のある指導者とともに検討しながら進めた。

2. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、対象者にはあらかじめ本研究の目的・調査内容・調査方法について文書を提示して説明し、同意を得た上で実施した。面接は、対象者の意志によって途中でも中止できること、対象者が話したくないことについては答えなくてよい旨を伝えた。また、録音した面接内容は、研究の目的以外では使用せず、研究終了後に破棄することを約束した。本調査の実施前に京都大学医療技術短期大学部（京都大学医学部保健学科）の研究委員会に研究計画書を提出した。

研 究 結 果

1. 対象者の特性

対象者男女4名とも、兄弟姉妹を持ち、子供は好きで将来的に子供を欲しいと思っている点が共通していた（表1）。

A（男性）は、高校卒業までは祖父母、両親、妹と同居していた。両親は幼い頃から共働きであったため、祖父母や伯母など身近な人に面倒を見てもらうことが多かった。子供に好感を持ち、将来自分の子供として男の子は必ず欲しいと考えている。

B（男性）は、現在までずっと両親・妹と同居している。幼い頃は、友達の弟や妹の面倒を見た経験がある。子供に対する印象は、やんちゃな子供は苦手であるなど、年齢や性格によっては好き嫌いがある。将来的には自分の子供として男女1人ずつ欲しいと考えている。

C（女性）は、高校卒業までは祖父母、両親、兄、妹と同居していた。幼い頃は、家族や身近な人によく面倒を見てもらったり、遊んでもらったりといった記憶がある。現在は家庭教師のアルバイトをしているため、小学生の子供と触れ合う機会が多い。将来的には自分の子供として男女1人ずつ欲しいと考えている。

D（女性）は、高校卒業までは両親、妹2人と同居していた。以前は小学生の家庭教師のアルバイトをしていたが、今は辞めたので子供との接触がない。我儘

* 京都市立病院

〒604-8845 京都市中京区壬生東高田町1-2
Kyoto Municipal Hospital

** 京都大学医学部保健学科看護学専攻

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

Department of Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kyoto University

受稿日 2005年9月9日

表1 対象者の概要

	A	B	C	D
性 別	男 性	男 性	女 性	女 性
兄弟姉妹構成	妹1人	妹1人	兄1人, 妹1人	妹2人
高校卒業までの家族構成	複合家族	核家族	複合家族	核家族
子供の頃家族や身近な人によく面倒をみてもらったり, 遊んでもらったりした記憶	あ る	な い	あ る	あ る
これまでに, 乳幼児を抱いたり, 一緒に遊んだりした経験	あ る	あ る	あ る	あ る
現在子供と触れ合う機会	あ る	な い	あ る	な い
育児に対する自信	あ る	な い	な い	あ る
欲しい子供の数	男の子は欲しいが女の子はどっちでもいい	2人(男, 女)	2人(男, 女)	2~3人(女の子は必ず)
子供の好き嫌い	好 き	年齢による	年齢による	性格による

な子供は苦手であるなど, 性格によって好き嫌いがあ
る。将来的には自分の子供を2~3人, 女の子は必ず
欲しいと思っている。

2. 大学生の育児意識

分析の結果, “育児のイメージ”, “理想とする育
児”, “パートナーへの期待” の3つの大カテゴリーが
抽出された(表2)。それぞれについて説明する。

1) 育児のイメージ

“育児のイメージ” は, 「育児は何とかなりそう
だ」「育児は大変そうだ」「育児に関心が持てそう
だ」の3つの中カテゴリーで構成されていた。

(1) 育児は何とかなりそう

「育児は何とかなりそうだ」は, 男子大学生だけ
にみられた内容である。育児に対して楽観的なイメ
ージを持っているようである。「泣かしたりするこ
とはあるかもしれないが, 別に普通に頑張って育
てれば, 何とかかなると思う(A)」「いざとなつたら
いろいろ考えるから, 何とかかなると思う(B)」とい
ったように,

抽象的で具体的な理由づけのない内容であった。

(2) 育児は大変そう

「育児は大変そうだ」は, 「育児はしんどそう
だ」「育児は面倒くさそうだ」の小カテゴリーに分類
され, 男女ともにみられた。女子大学生は「子供を
育てるというのは, やっぱりしんどいことの積み重
ねで私の母もノイローゼになりそうなくらい大変だ
ったと言っていた(D)」「(育児とはどんなことを
することかという)ごはんあげたり, ミルクあげ
たり, お風呂入れてあげたり, オシメ変えてあげ
たり, 一緒に遊んであげたり, 女の子だったら髪
も結ってあげたり。ちょっとしたことの何年もの
積み重ねだと思う(D)」男子大学生は「オムツの
交換とか面倒くさそう(B)」といったように, 子
育ては大変であるというイメージを持っていた。男
女に違いがみられ, 男子大学生は育児の大変さを
捉えて, 面倒くさそうとし, 女子大学生は具体的
に育児を思い描き, 精神的な大変さも含めてし
んどそうとしていた。

表2 大学生の育児意識

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
育児のイメージ	(1) 育児は何とかなりそう (2) 育児は大変そう (3) 育児に興味をもてそう	子育てはなんとかなる(男3) 育児はしんどそう(女2) 育児は面倒くさそう(男1) 育児はおもしろそう(男2) 育児はやりがいがある(女2) 子供の成長に期待をもてそう(女1)
理想とする育児	(1) 子供にはたくさんの経験をさせたい (2) 育てられたように育てたい (3) 子供が小さい頃は育児に専念したい	子供にはできる限りのことをしてあげたい(女2) 子供の将来のための基盤を作ってあげたい(男1) たくさんの機会を与えて多くのことに興味を持てるようにしたい(女2) 自分の育児観は親の影響が強い(男1, 女2) 自分の母親のようにになりたい(女2) 子供は自分達の手で育てたい(男1, 女1) 子供が小さい頃は育児に専念して子供のそばにいてあげたい(女2)
パートナーへの期待	(1) 子供への愛情ある育児を期待する (2) 育児への協力を期待する	子供に愛情を持って育ててほしい(男2) 奥さんにはちゃんとやることやってほしい(男2) 夫と一緒に育児をやりたい(女2) 育児への関心を示してほしい(女2)

※小カテゴリーの()内は延人数である

(3) 育児に興味がもてそうだ

「育児に興味がもてそうだ」は、〈育児はおもしろそう〉〈育児はやりがいがある〉〈子供の成長に期待がもてそうだ〉の小カテゴリーがあった。

「(育児は) なんかおもしろそう。会話ができるようになったら、やっぱり自分の子供と会話するのはおもしろそう (A)」「子供ってかわいいから楽しそう。一緒に寝たり遊んだりできるし (B)」という言葉から、男子大学生が、一緒に寝たり、遊んだり、会話することなど子供と接することにおもしろさを期待していると思われた。

〈育児はやりがいがある〉〈子供の成長に期待がもてそうだ〉は、女子大学生だけにみられた内容である。「自分の思い通りに育つわけではないから難しそうだけど、それなりにしんどいことをして頑張った代わりに、すごく嬉しいことがたくさんあると思う (D)」「(育児は) 親の私自身も何かを学んでいく感じがする。いろいろ知る機会も学ぶ機会も増えて、だんだん自分の器が広がっていく気がする (C)」「(育児は) 具体的に考えれば考えるほどすごいやりがいがあると思う。こんなに背が大きくなったとか。大きくなったら、一緒にスポーツをしたいとか。あれもこれもしようっていう期待の方が大きい (C)」「期待はみんな持っている。(私も) 期待がある (D)」といった内容があった。女子大学生は育児をしんどい思いながらも、一方で育児にやりがいや喜び・期待を持っていると思われる。

2) 理想とする育児

「理想とする育児」については、「子供にはたくさんの経験をさせたい」「育てられたように子供を育てたい」「子供が小さい頃は育児に専念したい」の3つの小カテゴリーで構成されていた。

(1) 子供にはたくさんの経験をさせたい

「子供にはたくさんの経験をさせたい」は、〈子供にはできる限りのことをしてあげたい〉〈子供の将来のための基盤を作ってあげたい〉〈たくさんの機会を与えて多くのことに興味をもてるようにしたい〉の3つの小カテゴリーがある。

〈子供にはできる限りのことをしてあげたい〉は、女子2名にだけみられた内容である。「私は、できる限り家にいて幼稚園から(子供が) 帰るのを待っていたり、まめにご飯を作ってあげたり、子供のために何かしてあげたい (C)」「多分子供がいること自体すごくうれしいことだと思うから、子供に対してしてあげられることはしたい (D)」というように、今の時期から自分にできることを具体的に考えている傾向がみられた。〈子供の将来のための基盤を作ってあげたい〉は、「(育児とは) 子供が将来、自分のやりたいことができるように基盤を作ってあげることだと思う。大き

くなって本人がやりたいって思った時、ちゃんと道が残っているような状態にしてやりたい (A)」という内容であった。〈たくさんの機会を与えて多くのことに興味をもてるようにしたい〉は、「子供が何かやりたいって言ったら絶対にやらせてあげる。きっかけは作ってあげたいと思う。私の両親がそういう方針だったから (C)」という内容であった。対象者の性別に関係なく、子供にはやりたいことをやらせて、自由を尊重していつか自分の興味のあることを見つけてもらいたいと考えていることがわかった。また、自分が育てられた環境や、親の影響もうけていた。

(2) 育てられたよう育てたい

「育てられたよう育てたい」には、〈自分の育児観は親の影響が強い〉、〈自分の母親のようになりたい〉の小カテゴリーで構成されていた。

〈自分の育児観は親の影響が強い〉は、男女ともにみられた。「やっぱり私(の子供に対する考え方は) 親にそっくりだと思う (C)」、「自分が経験してきたことなら、できると思う (A)」、「子供には教えてあげるのではなくて、自分から学んだり、覚えたりさせたい。私も小さい時そういうことあったから、いいなと思って。そうすると結構自分からいろいろなことに対して興味がわくと思うから (C)」といって、自分の育てられた体験をもとにして育児を捉えていた。〈自分の母親のようになりたい〉は、「もし子供で女の子ができたなら、お母さんみたいなお母さんになりたいと思う (D)」とあるように、対象者は、自分の育てられ方に満足している様子が見られた。また、自分の体験と両親の育児像をモデルにして、自分が育てられたように自分の子供も育てたいと考えていた。

(3) 子供が小さい頃は育児に専念したい

「子供が小さい頃は育児に専念したい」は、〈子供は自分たちの手で育てたい〉〈子供が小さい頃は育児に専念してこどものそばにいてあげたい〉の2つの小カテゴリーに分類された。

〈子供は自分たちの手で育てたい〉は、男女ともにみられた。「環境によって性格は変わると思うから、物心つくまではお父さんとお母さんで愛情を注ぎたい (D)」「子供は自分たちの手で育てるのが一番だが、共働きなら、自分たちの両親に預けることになるだろう (B)」と、二人で育てたいという内容が含まれている。〈子供が小さい頃は育児に専念して子供のそばにいてあげたい〉は、「私はいったん仕事をやめて育児に専念して、途中でまた仕事に戻る。できれば子供が高校生になったら仕事に行きたい (C)」「仕事を休めるんだったら子供が物心つくまでは休みたい。でも現実的には難しいと思う (D)」という言葉からわかるように、女子大学生は子供が小さい頃は育児に専念したいという願いを持っていながらも、実現の難しさ

を実感している。また、男性も同じような考えを持っていて、「(奥さんが子供を産んでも仕事を続けたいと言ったら) やっぱり説得すると思う。それでもやりたいて言うならしょうがないけど、やっぱり奥さんには育児に専念してほしい (B)」という意見を持っていた。

3) パートナーへの期待

「パートナーへの期待」は、「子供への愛情ある育児を期待する」「育児への協力を期待する」の2つの小カテゴリーで構成された。

(1) 子供への愛情ある育児を期待する

「子供への愛情ある育児を期待する」は、〈子供に愛情を持って育ててほしい〉の小カテゴリーがみられた。「奥さんには愛情を持って子供に接してほしい。愛情を持ちながら怒るところは怒る。褒めるところは褒める。でも過保護にならないように甘やかしすぎない (B)」「育児はいらいらして大変だろうが、虐待なんてしてほしくない (B)」男子大学生の中には子供に対する接し方についての要求や、虐待への意見がみられた。

(2) 育児への協力を期待する

「育児への協力を期待する」は、〈奥さんにはちゃんとやることをやってほしい〉〈夫と育児と一緒にやりたい〉〈育児への関心を示して欲しい〉の小カテゴリーに分類された。

〈奥さんにはちゃんとやることをやってほしい〉は、「ちゃんとやることはやって欲しい。働くなら働いてもいいけど、朝ごはんは絶対作るようにして朝の会話を大事にしたり、土日は必ず一緒にいたりとか、家族で行事は一緒にやる時間を設けるとか、どこか一箇所は必ず守ってほしい (A)」という男子学生の内容である。奥さんに育児と仕事の両立をもとめていた。〈夫と育児と一緒にやりたい〉は、女子大学生にみられた内容である。「夜泣きしてるときも一緒にヨシヨシヨシヨシってやってほしい (D)」「家事や洗濯も一緒にやりたい。ごはんもたまには一緒に作りたいし、そういうのが気軽にできる関係でありたい (D)」と、育児の分担を期待していた。〈育児への関心を示して欲しい〉も、女子大学生にみられた内容である。「対等に育児してほしい。二人で育児をしている感覚がほしい (C)」「子供に対して、私に対して関心を持っていることを示してほしい。同じ量の家事・育児をしなくてもいい。関心を示してくれるだけで私は大丈夫だと思う (C)」とあるように、将来の夫に対して育児への理解を示してほしいといった期待がみられた。

考 察

抽出した大カテゴリー「育児のイメージ」「パート

ナーへの期待」にみられた男女大学生の育児意識の違いと「理想とする育児」にみられた大学生の育児像に影響する体験について検討する。

1. 男女大学生の育児意識の違い

「育児のイメージ」「パートナーへの期待」について、男女大学生の育児意識の違いの視点から考察する。

「育児のイメージ」では、「育児は何とかなりそうだ」が男子大学生だけで、「育児は大変そうだ」「育児に興味を持てそうだ」は、男子大学生と女子大学生ともにみられた。「育児は大変そうだ」では、男子大学生の育児の行為を捉えた〈育児は面倒くさそうだ〉と、女子大学生の育児行為だけでなく育児のもたらす精神的な大変さをも含めた〈育児はしんどそうだ〉にわかれた。「育児に興味を持てそうだ」では、男子大学生が子供と会話や遊びなどで接することに興味を持って〈育児はおもしろそう〉としており、女子大学生は子供と接することでのおもしろさだけでなく、大変さや悩みも含めて〈育児はやりがいがある〉〈子供の成長に期待がもてそうだ〉としていた。本調査の対象者は全員が将来的に子供を欲しいと述べて、育児について意欲的な考えをもっていた。しかし、女子大学生の方が男子大学生より、育児についての責任の重大さと育児の困難さをより身近に受けとめていたと思われる。現代の育児については、1 労働と休息の区別が不明確な24時間の継続労働である、2 幼い子供の生理的欲求や心理的反応のキャッチのため神経が休まらない、3 言語的コミュニケーションが役立たず新しいコミュニケーションの開発に苦勞する、4 行動の予測が困難で気を休める暇がないなどをあげて、疲労感を抱きやすい労働であると報告される⁵⁾。本調査の女子大学生は、現代の育児の現実に近い育児像を抱いていたと考えられる。

「パートナーへの期待」では、下位のカテゴリーは男子大学生だけの「子供への愛情ある育児を期待する」と、男女両方ものの「育児への協力を期待する」に分類された。男子大学生に「子供への愛情ある育児を期待する」で、育児や家事を女性がやるべき役割と認識して〈子供に愛情を持って育ててほしい〉〈子供をあまやかさないでほしい〉といった内容がみられた。松岡らは、男女大学生を対象にした調査の中で性別役割分業観について検討し、男子は女子に対して家庭を中心とした伝統的な役割観を持っていると報告している⁶⁾。本調査でも、「育児への協力を期待する」では、男子大学生は〈(働いてもいいが) 奥さんにはやることをやってほしい〉にあるように仕事と育児の両立を求めている、男子大学生は育児の担い手を母親である女性の役割と認識する傾向にあったと考えられる。しかし、女子大学生は〈夫と一緒に育児をやりた

い)〈育児への関心を示して欲しい〉と、相手に育児や家事の分担をするための理解と協力を求めている。すでに、大学生の育児に期待する役割には、男女間での明らかな違いがみられる。日下⁷⁾は、青年期女子の性役割に関する意識について、高校の低学年にくらべて高学年の方が性役割態度において平等主義的な傾向を示すと報告しているが、その延長世代ともいえる本研究の女子大学生も、育児に共に関わりたいという思いを抱いていたと思われる。

現代の育児には、核家族化や地域とのつながりの希薄化、育児環境の変化によって、一人で子育てしなければならない母親の孤独感や重圧感は増し、母親を支える父親の役割が指摘されている⁸⁾。また、大藪⁹⁾、家庭中心志向の強い父親を夫に持つ母親は、自身の育児満足感を高く評価すると報告する。育児不安を抱える母親が多いといわれる現状で、母親にとって最も身近な存在である父親の育児への理解と協力は、母親の心理的負担を軽減させる意味あいも含めた必須のものと思われる。

子供とのふれあい体験がある学生のほうが、より子供好きであったと報告される¹⁰⁾ように、今後の支援対策の一つとして、結婚前の若い世代を対象とした子供との接触体験の機会を検討することが必要と考える。

2. 大学生の育児像に影響する体験

本研究結果では、“理想とする育児”という大カテゴリーが抽出され、「子供にはたくさんの経験をさせたい」「育てられたように育てたい」「子供が小さい頃は育児に専念したい」の中カテゴリーで構成されていた。これらの結果から、大学生の育児像の側面を推しはかることができる。

「子供にはたくさんの経験をさせたい」とあり、男女ともに、子どもには豊かな体験を培うための機会を与え環境を準備したいといった積極的な内容がみられた。氏家は、出産後の母親を対象に子ども時代の自分の母親の記憶と現在の母親としての態度との関係について調査し、子ども時代の自分の母親を肯定的に記憶していることは自身の母親としての肯定的な態度に関係していると報告している¹¹⁾。「育てられたように育てたい」には、〈自分の母親のようになりたい〉という自身の育てられ方を肯定する内容がみられた。本研究の対象者の特性として、全員兄弟を持ち、子どもの頃に家族や身近な人によく遊んでもらった記憶があると前述した。男女ともに自身の子供の頃の経験や兄弟姉妹とともに育った経験、自分の親が子育てをしてい

る様子を思い出して自身の育児像を描いていたと思われる。また、「子供が小さい頃は育児に専念したい」には、男女ともに乳幼児期の育児に積極的に関わりたいといった姿勢がみられた。大学生の男女の親になることに対する意識には、家族構成や母親の就労の有無などの影響は少なく、親子関係の質や兄弟姉妹のいる生活体験が関係しているとの報告がある¹²⁾。対象者である男女大学生の育児像には、自身の子供の頃の両親の育児する姿に裏付けられた体験が色濃く影響していることが推測された。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は男女大学生4名を対象とした調査であり、この結果だけで男女大学生全体の育児意識を述べるには限界がある。また、本研究においての対象者は全員子供がほしいと考えている育児に比較的肯定的な印象を抱いていたため、今後、否定的な育児意識を持つ大学生を対象とした育児意識の検討を要すると考える。

引用文献

- 1) 川井 尚: 育児における父親の役割. 小児保健研究, 1992; 51: 671-678
- 2) 中沢恵子, 太田百合子, 植松紀子, 他: 育児支援についての一考察. 小児保健研究, 1996; 55(1): 584-590
- 3) 木田淳子: 共働き家庭における父親の育児行動. 滋賀大学教育学部紀要, 人文・社会・教育科学, 1980; 30: 116-135
- 4) 岡本絹子, 中村裕美子, 山口三重子, 他: 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. 小児保健研究, 2002; 61(1): 692-700
- 5) 佐々木保行: 母親の子育てと育児疲労の心理. 現行のエスプリ, 1996; 342: 98-106
- 6) 松岡知子, 堀内寛子, 山中亜紀, 伊藤倫子: 男女大学生の親になることに関する意識. 母性衛生, 2000; 41(4): 398-404
- 7) 日下知子, 亀和田梓, 他: 青年期女子の性役割に関する研究. 川崎医療短期大学紀要, 2004; 24: 25-29
- 8) 吉田弘道, 野尻恵, 安藤朗子, 他: 育児における父親の役割と父親への援助に関する研究. 小児保健研究, 1997; 56(1): 20-26
- 9) 大藪 泰, 前田忠彦: 乳児を持つ母親の育児満足感の形成要因Ⅲ. 小児保健研究, 1997; 56(1): 54-60
- 10) 倉 繁迪, 猪野郁子: 育児に関する学生の意識調査. 小児保健研究, 2001; 60(3): 447-453
- 11) 氏家達夫: 子ども時代の母親についての記憶が母親としての態度に及ぼす影響について. 母性衛生, 1995; 36(1): 173
- 12) 松岡治子, 和田桂子, 花沢成一: 青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達. 母性衛生, 2000; 41(4): 500-505